

【論文】

九州産業大学図書館蔵「百人一首かるた」(911.147/H99/10) — 解題と翻刻 —

宮 崎 裕 子

一 解題

本稿は、江戸中期の成立とされる九州産業大学図書館蔵「百人一首かるた」について、詠者の姿を描いた歌仙絵を伴う江戸時代の代表的な『百人一首』版本と比較しつつ、紹介するものである。

1 書誌

今回紹介する「百人一首かるた」は、九州産業大学図書館が平成三年に受け入れたカルタで、江戸中期に成ったとされるものである。

この九州産業大学図書館蔵「百人一首かるた」(以下「九産大本」)の書誌を以下に記す。

【体裁】 読札(絵札)・取札共各一〇〇。八・五×六糎。

絵札：紙本金銀泥極彩色画、取札：紙本金泥下絵入料紙。

内帙。黒塗箱(一一・五×一六・三×一五糎)入り。

【書名】 古書店の目録による。

【請求記号】 911.147/H99/10

【資料ID】 10946943

2 歌仙絵

江戸時代前期に広く用いられた代表的な百人一首の歌仙絵は、森暢氏によって次の三つの版本を中心とする三系統に分類された。^(註)

(1)素庵本百人一首(以下「素庵本」)

現存最古の歌仙絵入百人一首。元和〜寛永頃の成立と推定される。

(2)延宝六年刊『百人一首像讚抄』(以下『像讚抄』)
細川幽斎注に菱川師宣画の絵入注釈書。

(3)長谷川光信画百人一首(以下「光信本」)

享保一二年刊。

堀内忠兵衛編・長谷川光信画の女性向け往来物。書名不明。

所在が確認されているのは上田市立上田図書館花月文庫蔵の
一本のみ。

素庵本・『像讚抄』・光信本と九産大本の歌仙絵を比較したところ、
九産大本の絵札に描かれた歌仙絵は素庵本に最も近似することが判
明した。江戸時代に制作された百人一首カルタの歌仙絵の多くは、
素庵本と同本の系統と見なされる『尊円百人一首』（以下「尊円本」）
の絵を手本にしていると考えられており、九産大本もそのようなカ
ルタの一つなのである。

それでは、九産大本の歌仙絵は素庵本・尊円本、いずれの影響を
より大きく受けているのか。三本の絵の構図等を比較し、その結果
を整理したのが、次の表1である。

◇九産大本の欄には、素庵本・尊円本の双方と同じ構図であれば「○」を、
差異がある場合は相違点を記した。

◇素庵本・尊円本の欄には、九産大本と同じ構図であれば「○」を、差異
がある場合は相違点を記した。

◇詠者名の欄には九産大本の表記を記載した。

◇素庵本・尊円本に比べると、九産大本には髭のある男性が少ない傾向が
見えるため、髭の有無そのものは差異に含めなかった。

◇九産大本・素庵本では皇族扱いをされている人物が皇族用の纏綯縁の畳
に座った姿で描かれ、臣下扱いをされている人物は畳に座らない姿で描
かれているが、尊円本では皇族扱いをされている人物が纏綯縁の畳、臣
下扱いをされている人物は高麗縁の畳に座った姿で描かれている。した
がって、畳に関しては、ある本で纏綯縁の畳に座らせられている歌人が
他本では高麗縁の畳に座らせられている、もしくは、畳無しの状態で描
かれている場合に限り、相違点として挙げた。

◇次のような些細な違いは差異と見做さなかった。

〔例1〕顔の傾き具合（顔をやや上向きに傾けている、いないの違い等）。

〔例2〕手の位置の若干のずれ（袖の位置が胸元か、首の下付近かの違
い等）。

〔例3〕扇の持ち方（上向きに持つか、下向きに持つかの違い等）。

【表1】

歌番号	詠者名	九産大本	素庵本	尊円本
1	天智天皇	○	○	○
2	持統天皇	○	○	○
3	柿本人丸	○	○	○
4	山辺赤人	○	○	○
5	猿丸大夫	○	○	○
6	中納言家持	○	○	○
7	安倍仲麿	○	○	○
8	喜撰法師	右手に扇を持つ。貴人坐。	扇無し。左立膝。	扇無し。左立膝。
9	小野小町	顔は左向き。	上体を左下に傾ける。	上体を左下に傾ける。
10	蝉丸	両袖を胸の前で交差。扇無し。	右手を右頬に当てて、左手は膝の上に置く。右手に扇を持つ。	右手を右頬に当てて、左手は膝の上に置く。右手に扇を持つ。
11	参議篁	○	○	○
12	僧正遍昭	扇無し。	右手に扇を持つ。	右手に扇を持つ。
13	陽成院	○	○	○
14	河原左大臣	右手は下ろした状態。	右袖を顎に当てている。	右袖を顎に当てている。
15	光孝天皇	○	○	○
16	中納言行平	○	○	○
17	在原業平朝臣	体は右向き。右手を胸元に上げ、左袖は足の上に位置する。	○	体は左向き。両手は膝の辺りに置く。
18	藤原敏行朝臣	○	○	○
19	伊勢	両袖を胸の前で合わせる。	左袖を口元に当て、右手は足元に下ろす。	左袖を口元に当て、右手は足元に下ろす。
20	元良親王	○	○	○
21	素性法師	○	○	○
22	文屋康秀	○	○	○
23	大江千里	○	○	○
24	菅家	○	○	○
25	三条右大臣	○	○	○
26	貞信公	○	○	○
27	中納言兼輔	笏無し。(註6)	○	右手に笏を持つ。
28	源宗于朝臣	○	○	○
29	凡河内躬恒	○	○	○
30	壬生忠岑	笏無し。	右手に笏を持つ。	右手に笏を持つ。
31	坂上是則	○	○	○
32	春道列樹	右手を右足の外側に下ろす。	右手が胸の前に位置する。	右手が胸の前に位置する。
33	紀友則	足元に笏が置かれている。	○	笏無し。
34	藤原興風	○	○	○
35	紀貫之	○	○	○
36	清原深養父	右手は胸の前に位置する。	右手は右膝の上に置く。	右手は右膝の上に置く。
37	文屋朝康	○	○	○

九州産業大学図書館蔵「百人一首かるた」

歌番号	詠者名	九産大本	素庵本	尊円本
38	右近	○	○	○
39	参議等	弓有り、矢無し。右袖は胸の下付近に位置する。	弓矢ともに有り。右手は足の上付近に置かれた状態。	弓矢ともに有り。右手で髭を掴む。
40	平兼盛	○	○	○
41	壬生忠見	扇無し。	右手に扇を持つ。	右手に扇を持つ。
42	清原元輔	○	○	○
43	権中納言敦忠	○	○	○
44	中納言朝忠	○	○	○
45	謙徳公	帯刀する。扇無し。	帯刀しない。左手に扇を持つ。	帯刀しない。左手に扇を持つ。
46	曾祢好忠	○	○	○
47	恵慶法師	○	○	○
48	源重之	顔は左向き。扇無し。	正面を向く。左手に扇を持つ。	正面を向く。左手に扇を持つ。
49	大中臣能宣	○	○	○
50	藤原義孝	○	○	○
51	藤原実方	○	○	○
52	藤原道信朝臣	○	○	○
53	右大将道綱母	上体は傾けず、顔は右向き。左手を首の辺りに上げている。	上体を右下にやや傾け、右手を口の辺りに上げる。	上体を右下にやや傾け、右手を口の辺りに上げる。
54	儀同三司母	○	○	○
55	大納言公任	○	○	○
56	和泉式部	○	○	○
57	紫式部	右手を首の辺りに上げ、顔は左を向く。	両袖を袴の上辺りの位置で揃え、顔はやや左下を向く。	両袖を袴の上辺りの位置で揃え、顔はやや左下を向く。
58	大貳三位	○	○	○
59	赤染衛門	纒縹縁の畳。顔は左下向き。	畳無し。顔は右下向き。	○
60	小式部内侍	扇は首の辺りに位置する。上体は傾けず、顔は左下向き。	口を扇で隠し、上体を左下に傾ける。	口を扇で隠し、上体を左下に傾ける。
61	伊勢大輔	左手を胸の辺りに上げる。	左袖を口元に当てる。	左袖を口元に当てる。
62	清少納言	○	○	○
63	左京大夫道雅	帯刀しない。両袖は腹部の前に位置する。	帯刀する。右手を胸の辺りに上げる。	帯刀する。右手を胸の辺りに上げる。
64	権中納言定頼	○	○	○
65	相模	○	○	○
66	大僧正行尊	数珠無し。	両手で数珠を持つ。	両手で数珠を持つ。
67	周防内侍	○	○	○
68	三条院	○	○	○
69	能因法師	左膝を立て、左手をその上に置く。右手は胸の辺りに上げる。	貴人坐。右袖を口元に当て、左手は左膝の辺りに位置する。	貴人坐。右袖を口元に当て、左手は左膝の辺りに位置する。
70	良暹法師	数珠無し。	右手に数珠を持つ。	右手に数珠を持つ。

宮崎 裕子

歌番号	詠者名	九産大本	素庵本	尊円本
71	大納言経信	○	○	○
72	祐子内親王家紀伊	縹緗縁の畳に座り、几帳で半身を隠す。体は右向き。右袖は描かれていない。	縹緗縁の畳に座り、几帳で半身を隠す。体は右向き。右袖を上げる。	高麗縁の畳に座る。几帳無し。体は左向き。右手に扇を持ち、左袖を口元に当てる。
73	権中納言匡房	貴人坐のような後ろ姿。	右膝を立てているような後ろ姿。	右膝を立てているような後ろ姿。
74	源俊頼朝臣	左手を左膝の外側に下ろす。	左手で髭に触れる。	左手で髭に触れる。
75	藤原基俊	○	○	○
76	法性寺入道前関白太政大臣	○	○	○
77	崇徳院	○	○	○
78	源兼昌	○	○	○
79	左京大夫顕輔	○	○	○
80	待賢門院堀河	畳なし。顔も体も右向き、右手の袖で口元を隠す。	縹緗縁の畳。体は右向き、顔は左向き。右袖は、体からやや離して胸の高さまで上げている。	縹緗縁の畳。体も顔も右向き。右袖は肩よりも下の位置にある。
81	後徳大寺左大臣	○	○	○
82	道因法師	数珠無し。右手を首付近まで上げ、左袖は膝の上辺りに位置する。	右袖を右膝の上に置き、右手に数珠を持つ。左手は胸の辺りまで上げる。	右袖を右膝の上に置き、右手に数珠を持つ。左手は胸の辺りまで上げる。
83	皇太后宮大夫俊成	右手に扇を持つ。	扇無し。	扇無し。
84	藤原清輔朝臣	扇無し。	右手に扇を持つ。	右手に扇を持つ。
85	俊恵法師	数珠無し。	両手で数珠を持つ。	両手で数珠を持つ。
86	西行法師	両袖を胸の前に上げて合わせている。	両手を袖から出して、両膝の上に置く。	両手を袖から出して、両膝の上に置く。
87	寂蓮法師	○	○	○
88	皇嘉門院別当	○	○	○
89	式子内親王	○	○	○
90	殷富門院大夫	上体は傾げず、顔をやや左に向ける。	上体をやや右に傾けて、左上を仰ぎ見るような姿勢。	上体をやや右に傾けて、左上を仰ぎ見るような姿勢。
91	後京極摂政太政大臣	○	○	○
92	二条院讃岐	両袖は膝の上辺りに位置する。	右手を肩付近に上げている。	右手を肩付近に上げている。
93	鎌倉右大臣	○	○	○
94	参議雅経	○	○	○
95	前大僧正慈圓	○	○	○
96	入道前太政大臣	笏無し。	右手に笏を持つ。	右手に笏を持つ。
97	権中納言定家	○	○	○
98	従二位家隆	平礼烏帽子らしきものを被る。左手は首の下、右手は胸の辺りに上げている。	烏帽子を被る。両手とも足の辺りまで下ろした状態。	烏帽子を被る。両手とも足の辺りまで下ろした状態。
99	後鳥羽院	○	○	○
100	順徳院	○	○	○

表1に記載した歌仙絵の相違点を集計すると、次のようになる。

素庵本・尊庵本のいずれとも構図が異なる絵札……34枚
 素庵本とのみ構図が異なる絵札………1枚
 尊円本とのみ構図が異なる絵札………3枚

*

また、皇族が使用する纏綯縁の畳に座らせられているか、いないかは、当該人物を皇族と見做すか、臣下と見做すかという解釈の違いに関わる部分であり、誤写の可能性や絵師の好みに影響される要素が少ないと考えられる。そこで、保元の乱を起こして讃岐に配流され、上皇でありながら、纏綯縁の畳に座らない姿で描かれることも多かった崇徳院^(崇徳)、臣下であるにもかかわらず、「内親王」「門院」という皇族女性を示す語が呼称に含まれることや、皇族女性の呼び名に似た女房名ゆえの誤解によって皇族扱いされたと考えられる女房階級の女性たち三名の歌仙絵について、纏綯縁の畳の有無を次の表2に抽出した。

【表2】

歌番号	詠者名	九産大本	素庵本	尊円本
59	赤染衛門	有	無	有
72	祐子内親王家紀伊	有	有	無
77	崇徳院	無	無	無
80	待賢門院堀河	無	有	有

*

このように、表1・2の集計結果では、九産大本の歌仙絵が素庵本・尊円本のどちらにより近似しているのか、判断し難い。

素庵本とのみ構図が異なる絵札は一枚、尊円本とのみ構図が異なる絵札は三枚であり(表1)、わずか二枚の差に有意性を認めるのは無理がある。しかも、纏綯縁の畳の有無に関しては、素庵本のみと同じ解釈、尊円本のみと同じ解釈が一例ずつ見られ、近似性の差が無い。

3 和歌本文及び詠者名

九産大本は写本であるが、現行の百人一首カルタと比較しても、和歌本文に誤写によると思われる異同は見受けられない。現行の百人一首カルタとは本文が若干異なる和歌を含んでいるが、そもそも、『百人一首』の和歌本文には複数の伝本や注釈書に共通する異同があり、九産大本の異同もその範疇に収まっている。

素庵本と尊円本の和歌本文にも、現行の百人一首カルタとの異同はさほど多くなく、九産大本・素庵本・尊円本の和歌本文から現行の百人一首カルタと異なる箇所を抜き出して整理すると、次表3のようになる。

◇歴史的仮名遣い等にかかわる平仮名表記の違いは取り上げなかった。

◇同一の語の漢字表記・平仮名表記の別、撥音「む」「ん」の表記の違い

は異同に挙げなかった。
 ◇濁点の有無は、異同に挙げなかった。

【表3】

歌番号・句	現行の百人一首カルタ	九産大本	素庵本	尊円本
36・四句	雲のいづこに	雲のいつこに	雲のいつくに	雲のいつこに
49・三句	夜は燃え	よるはもえて	夜はもえ	夜はもえて
50・結句	思ひけるかな	思ひけるかな	おもひぬる哉	思ひぬるかな
55・初句	瀧の音は	瀧のをとは	瀧の糸は	瀧の音は
55・三句	なりぬれど	成ぬれと	なりぬれと	成ぬれと
57・結句	夜半の月かな	夜半の月かけ	夜半の月影	夜半の月哉
68・二句	憂き世に	うき世に	此世に	この世に
70・四句	いづこも同じ	いづくもおなし	いづくもおなし	いづくもおなし
74・三句	山おろしよ	山おろし	山下風	山おろし
85・三句	明けやらで	あけやらぬ	明やらぬ	明やらで
92・初句	我が袖は	わか袖は	我袖は	我恋は
99・二句	人も恨めし	人もうらめし	人も恨めし	人もめらめし

※「恋」の傍注に「袖」とあり。

九産大本の和歌本文が、素庵本・尊円本のいずれとも異なるのは三箇所、素庵本とのみ異なるのは二箇所、尊円本とのみ異なるのは五箇所である。ただし、尊円本の五五番歌三句と九九番歌二句の異文は、明らかな誤謬である上に、誤りを正すために施されたと考えられる傍書に従えば、九産大本・素庵本と同じ本文になるため、九

産大本の和歌本文が尊円本とのみ異なっているのは、実質的には三箇所である。

したがって、歌仙絵と同じく、和歌本文に關しても、素庵本と尊円本の間には九産大本との近似性の差を見出すことは難しい。

*

次に、詠者名表記の相違点について確認する。

九産大本・素庵本・尊円本の詠者名の異同を整理すると、次表4のようになる。

【表4】

歌番号	現行の百人一首カルタ	九産大本	素庵本	尊円本
43	権中納言敦忠	権中納言敦忠	権中納言敦忠	中納言敦忠
49	大中臣能宣朝臣	大中臣能宣	大中臣能宣	大中臣能宣朝臣
51	藤原実方朝臣	藤原実方	藤原実方朝臣	藤原実方朝臣
66	前大僧正行尊	大僧正行尊	大僧正行尊	前大僧正行尊
73	権中納言匡房	権中納言匡房	前中納言匡房	前中納言匡房
90	殷富門院大輔	殷富門院大夫	殷富門院大輔	殷富門院大輔
98	従二位家隆	従二位家隆	従二位家隆	正三位家隆

九産大本の詠者名表記が、素庵本・尊円本のいずれとも異なるのは三例、素庵本とのみ異なる事例はなく、尊円本とのみ異なるのは四例。僅かな差ではあるものの、詠者名表記に關しては、素庵本の方が九産大本との共通点が多い。

二 翻刻

【凡例】

- 1. 漢字は現行の字体に改めた。
- 2. 破損により判読できない文字は「□」で示した。

- 1 秋の田のかりほのいほのとまをあらみ我ころも手は露にぬれつゝ、
天智天皇
- 2 春すきて夏きにけらし白妙の衣ほすてふあまのかく山
持統天皇
- 3 あし引の山鳥のおのしたりおのなかくし夜をひとりかもねん
柿本人丸
- 4 田子のうらにうち出てみれば白妙のふしのたかねに雪はふりつゝ、
山辺赤人
- 5 おく山にもみちふみわけなくしかのこゑきくときぞ秋はかなしき
猿丸大夫
- 6 かさゝきのわたせるはしにをくしものしるきをみれば夜そふけにける
中納言家持
- 7 あまの原ふりさけみれはかすかなるみかさの山にいてし月かも
安倍仲磨
- 8 我いほはみやこのたつみしかそすむ世をうち山と人はいふ也
喜撰法師
- 9 花の色はうつりにけりないたつらにわか身世にふるなかくせしまに
小野小町
- 10 これやこの行もかへるもわかれてはしるもしらぬもあふさかのせき
参議篁
- 11 わたの原八十嶋かけてこき出ぬと人にはつけよあまのつりふね
僧正遍昭
- 12 あまつかせ雲のかよひち吹とちよをとめのすかたしはしとゝめん
陽成院
- 13 つくはねのみねよりおつるみなの河恋そつもりてふちとなりける
河原左大臣
- 14 みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにし我ならなくに
光孝天皇
- 15 君かため春のゝにいてゝわかなつむ我ころも手に雪はふりつゝ
中納言行平
- 16 立わかれいなほの山のみねにおふるまつとしきかはいまかへりこん
在原業平朝臣
- 17 千はやふる神よもきかすたつた河からくれなるに水くゝるとは
藤原敏行朝臣
- 18 すみのえのきしによるなみよるさへや夢のかよひち人めよくらん
伊勢
- 19 なにはかたみしかきあしのふしのまもあはてこのよをすくしてよとや
元良親王
- 20 わひぬれは今はおなしなにはなる身をつくしてもあはんとぞ思ふ
素性法師
- 21 今こんといひしはかりに長月の有明の月をまちいてつるかな

- 22 吹からに秋の草木のしほるればむへ山かせをあらしといふらん
文屋康秀
- 23 月みれば千々にもこそかなしけれわか身ひとつの秋にはあらねと
大江千里
- 24 このたひはぬさもとりあへず手向山もみちのにしき神のまに〜
菅家
- 25 なにしおはゝあふさか山のさねかつら人にしられてくるよしもかな
三条右大臣
- 26 をくら山みねのもみちは心あらはいま一たひのみゆきまたなん
貞信公
- 27 みかの原わきてなかるゝいつみ河いつみきとてか恋しかるらん
中納言兼輔
- 28 山里は冬ささひささまさりける人めも草もかれぬとおもへは
源宗于朝臣
- 29 心あてにおらはやおらんはつ籍のをきまとはせるしらきくのはな
凡河内躬恒
- 30 有明のつれなくみえしわかれよりあかつきはかりうきものはなし
壬生忠岑
- 31 朝ほらけ有明の月とみるまでによし野のさとにふれるしら雪
坂上是則
- 32 山川に風のかけたるしからみはなかれもあへぬもみちなりけり
春道列樹
- 33 久かたのひかりのとけき春の日にしつこゝろなくはなのちるらん
紀友則
- 34 たれをかもしる人にせん高砂の松もむかしのともならなくに
藤原興風
- 35 人はいさ心もしらすふるさととはなぞむかしのかにほひける
紀貫之
- 36 夏の夜はまたよひなからあけぬるを雲のいつこに月やとらん
清原深養父
- 37 しら露に風のみきしく秋のゝはつらぬきとめぬ玉そちりける
文屋朝康
- 38 わすらるゝ身をは思はずちかひてし人のいのちのおしくも有かな
右近
- 39 あさちふのをのゝしのはらしのふれとあまりてなどか人の恋しき
参議等
- 40 しのふれと色に出にけりわか恋はものやおもふと人のとふまで
平兼盛
- 41 恋すてふわかなはまたきたちにけりひとしれすこそおもひそめしか
壬生忠見
- 42 ちきりきなかたみに袖をしほりつゝすゑのまつ山なみこさしとは
清原元輔
- 43 あひみてののちの心にくらふればむかしはものをおもはざりけり
権中納言敦忠
- 44 あふことのためてしなくは中〜に人をも身をもうらみさらまし
中納言朝忠
- 45 あはれともいふへき人はおもほえて身のいたつらになりぬへきかな
謙徳公
- 46 ゆらのとをわたるふな人かちをたえ行衛もしらぬ恋のみちかな
曾祢好忠
- 47 八えむくらしけれるやとのさひしきに人こそみえね秋はきにけり
惠慶法師
- 48 風をいたみ岩うつなみのをのれのみくたけてものを思ふころかな
源重之
- 49 みかきもりゑしのたく火のよるはもえてひるはきえつゝものをこそおもへ
大中臣能宣

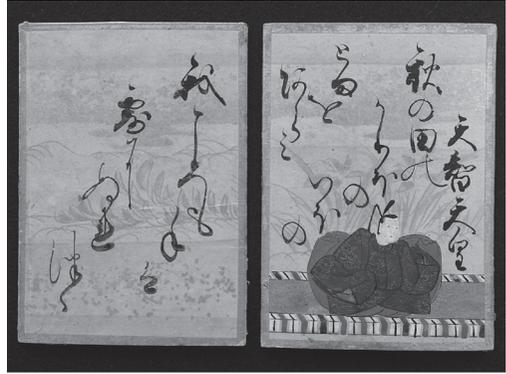
- 50 君かためおしからさりしいのちさへなかくもかなと思ひけるかな 藤原義孝
 51 かくとたにえやはいふきのさしも草さしもらしな思ひを 藤原実方
 52 あけぬれはくるきものとはしりなかなをうらめしきあさほらけかな 藤原道信朝臣
 53 なげきつゝひとりぬるよのあくるまはいかにひさしきものとかはしる 右大將道綱母
 54 わすれしの行すゑまではかたければけふをかきりのいのちともかな 儀同三司母
 55 瀧のをとはたえて久しく成ぬれと名こそなかれてなをきこえけれ 大納言公任
 56 あらさらむこの世のほかの思ひ出に今一たひのあふこともかな 和泉式部
 57 めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かけ 紫式部
 58 有ま山いなさゝはら風ふけはいてそよ人をわすれやはする 大式三位
 59 やすらはてねなましものをさよふけてかたふくまでの月をみしかな 赤染衛門
 60 大え山いくのゝみちのとをければまたふみもみすあまのはしたて 小式部内侍
 61 いにしへのならのみやこの八えさくらけふこのえにほひぬるかな 伊勢大輔
 62 夜をこめて鳥のそらねははかるともよにあふさかのせきはゆるさし 清少納言
 63 今はたゝおもひたえなんとばかりを人つてならていふよしもかな 左京大夫道雅
 64 あさほらけうち川きりたえくゝにあらはれわたるせゝのあしろ木 権中納言定頼
 65 うらみわびほさぬ袖たにあるものを恋にくちなんなこそおしけれ 相模
 66 もろともにあはれとおもへ山さくらはなよりほかにしる人もなし 大僧正行尊
 67 春の夜の夢はかりなる手まくらにかひななくたゝんなこそおしけれ 周防内侍
 68 心にもあらてうき世になからへは恋しかるへき夜はの月かな 三条院
 69 あらし吹みむろの山のみみちはゝたつたの川のにしきなりけり 能因法師
 70 さひしさにやとをたち出てなかわれはいつくもおなし秋の夕くれ 良運法師
 71 夕されはかたのいなはをとつれてあしの丸屋に秋風そふく 大納言経信
 72 をとにきくたかしはまのあたなみはかけしや袖のぬれもこそすれ 祐子内親王家紀伊
 73 高砂のおのへのさくらさきにけりとやまのかすみたゝすもあらなん 権中納言匡房
 74 うかりける人をはつせの山おろしはけしかれとはいのらぬものを 源俊頼朝臣
 75 ちきりをきしさせもか露をいのちにてあはれことしの秋もいぬめり 藤原基俊
 76 和田の原こき出てみれば久かたの雲井にまかふおきつしらなみ 法性寺入道前関白太政大臣
 77 せをはやみ岩にせかるゝたき川のわれてもすゑにあはんとそおもふ 崇徳院

- 78 あはち嶋かよふ千鳥のなくこそゑにいく夜ねさめぬすまのせきもり 源善昌
 79 秋風にたな引雲のたえまよりもれいつる月のかけのさやけさ 左京大夫顯輔
 80 なかゝらん心もしらすくろかみのみたれてけさはものをこそおもへ 待賢門院堀河
 81 ほとゝきすなきつるかたをなかわれはたゝ有明の月そのこれる 後徳大寺左大臣
 82 おもひわひさてもいのちはあるものをうきにたえぬはなみたなりけり 道因法師
 83 世の中よみちこそなけれおもひ入山のおくにもしかそなくなる 皇太后宮大夫俊成
 84 なからへはまたこのころやしのはれんうしとみしよいまは恋しき 藤原清輔朝臣
 85 夜もすからものおもふころはあけやらぬねやのひまさへつれなかりけり 俊恵法師
 86 なけゝとて月やはものをおもはするかこちかほなる我なみたかな 西行法師
 87 むら雨の露もまたひぬまきのはにきりたちのほる秋の夕くれ 寂蓮法師
 88 なにはえのあしのかりねの一よゆへ身をつくしてやこひわたるへき 皇嘉門院別当
 89 玉のをよたえなはたえねながらへはしのふることのよはりもそす 式子内親王
 90 みせはやなをしまのあまの袖たにもぬれにそぬれし色はかはらす 殿富門院大夫
 91 きりくすなくやしものさむしろに衣かたしきひとりかもねん 後京極攝政太政大臣
 92 わか袖はしほひにみえぬおきのいしの人こそしらねかはくまもなし 二条院讃岐
 93 世の中はつねにもかもななきさこくあまのをふねのつなてかなしも 鎌倉右大臣
 94 みよしのゝ山の秋風さよふけてふるさとさむくころもうつなり 參議雅経
 95 おほけなくうき世のたみにおほふかな我たつそまにすみそめのそて 前大僧正慈円
 96 花さそふあらしの庭の雪ならてふり行ものはわか身なりけり 入道前太政大臣
 97 こぬ人をまつほのうらの夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ 権中納言定家
 98 風そよくならの小川の夕くれはみそきそなつのしるしなりける 従二位家隆
 99 人もおし人もうらめしあちきなくよを思ふゆへにものおもふ身は 後鳥羽院
 100 もゝしきやふるきのきはのしのふにもなをあまりあるむかしなりけり 順徳院

三 影印



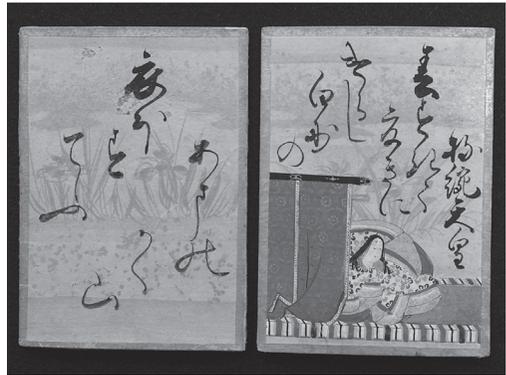
4



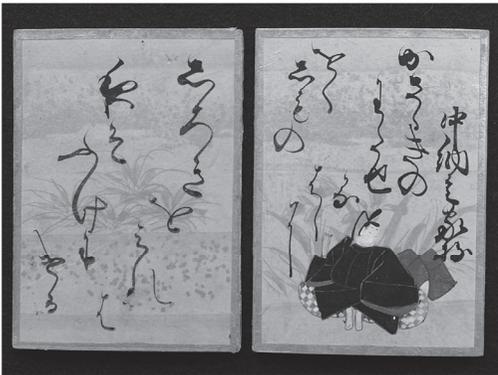
1



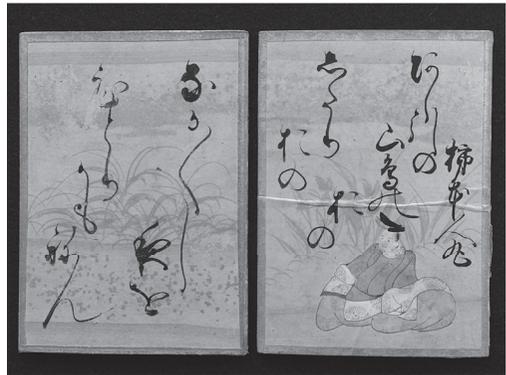
5



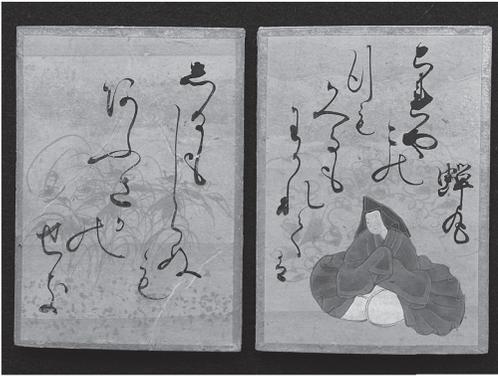
2



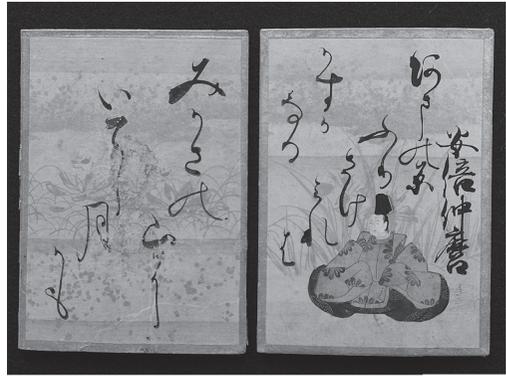
6



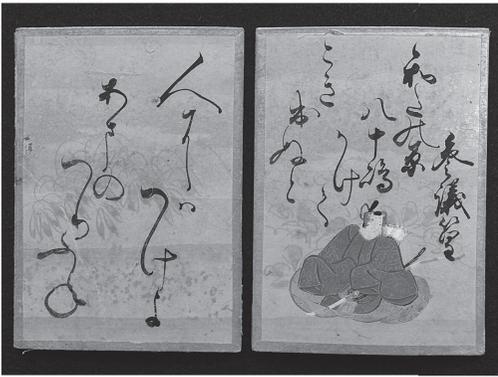
3



10



7



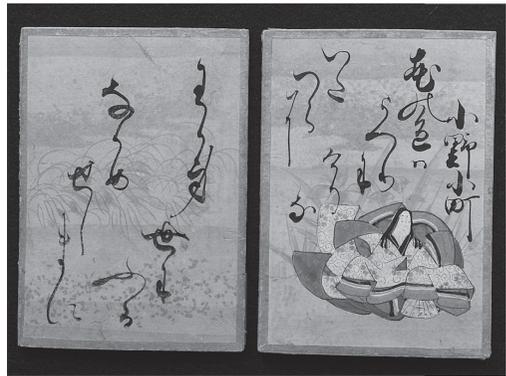
11



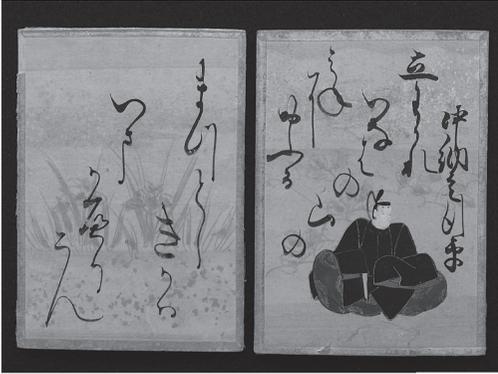
8



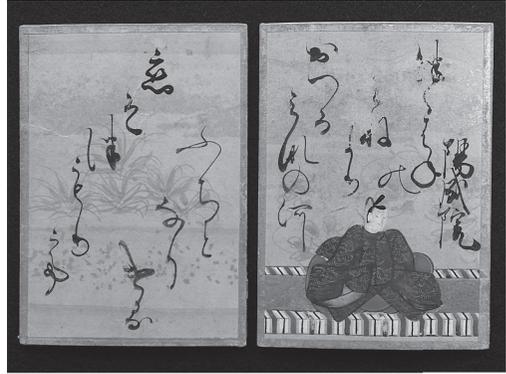
12



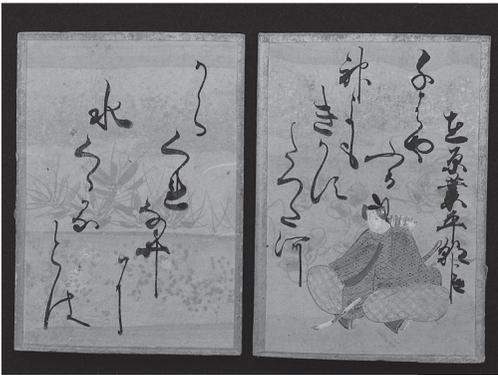
9



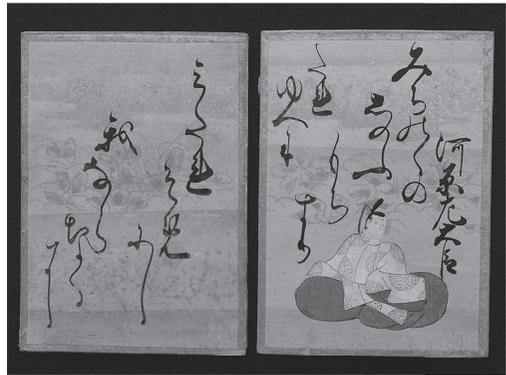
16



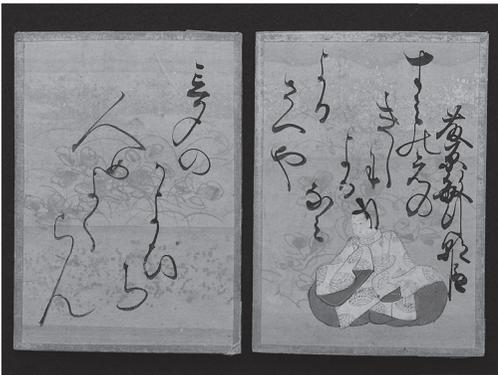
13



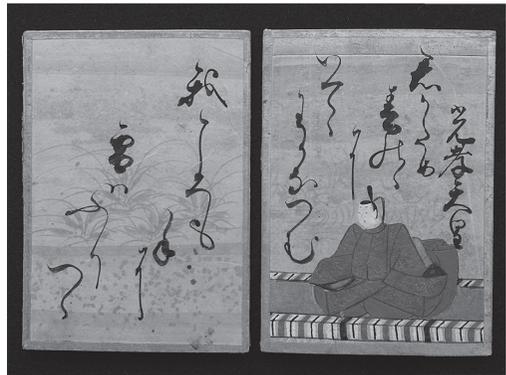
17



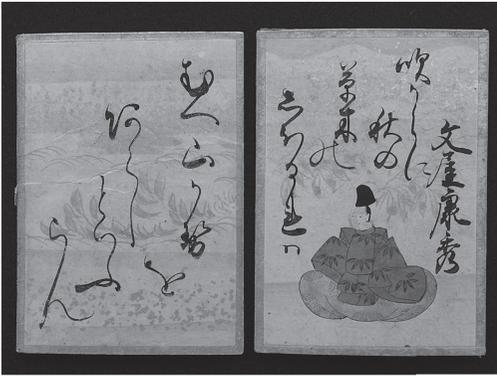
14



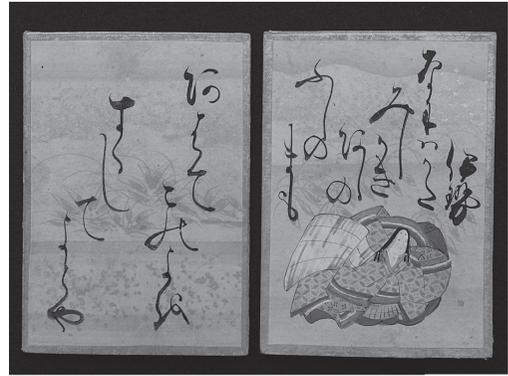
18



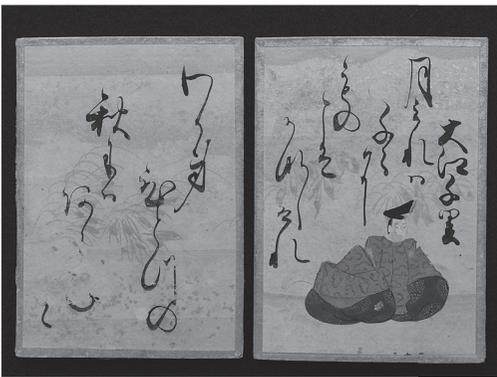
15



22



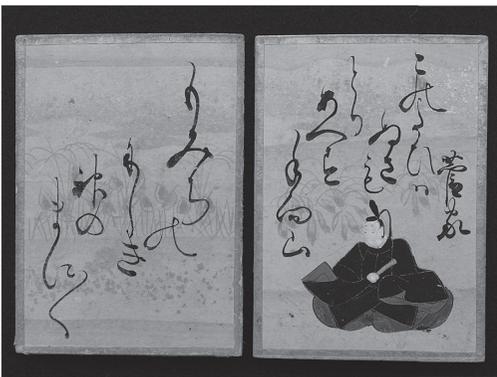
19



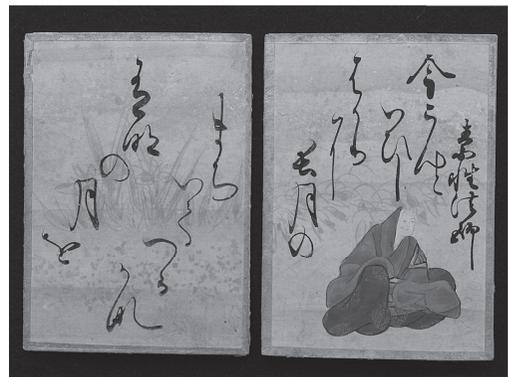
23



20



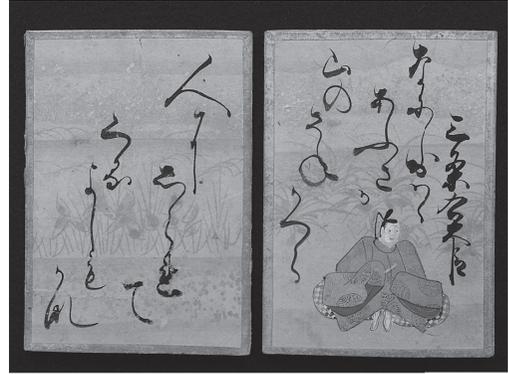
24



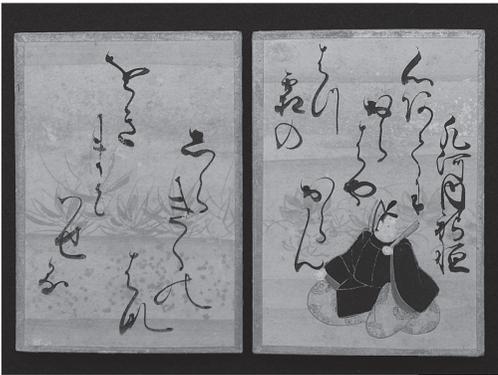
21



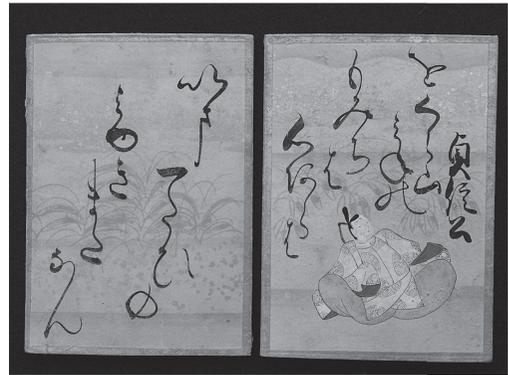
28



25



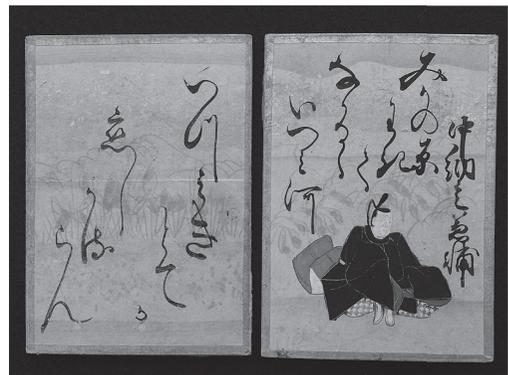
29



26



30



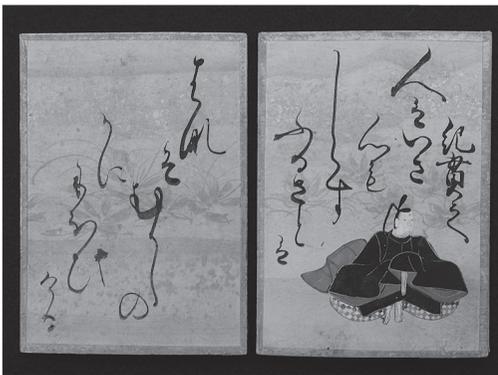
27



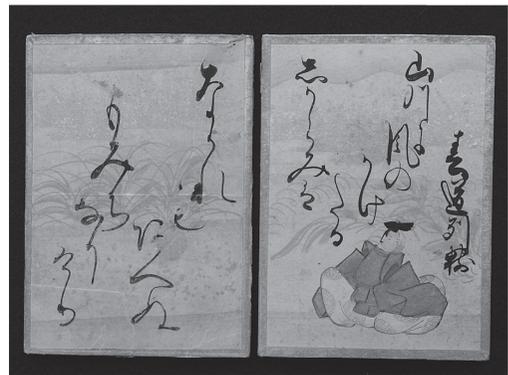
34



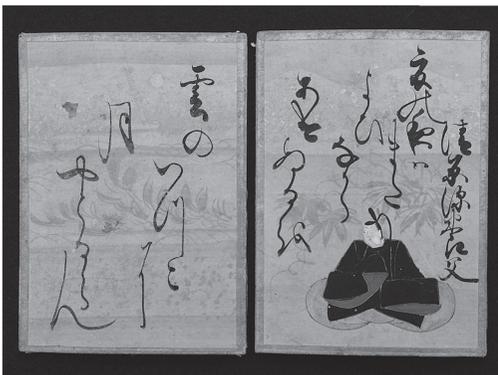
31



35



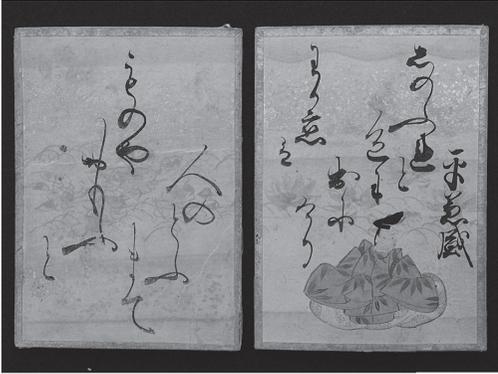
32



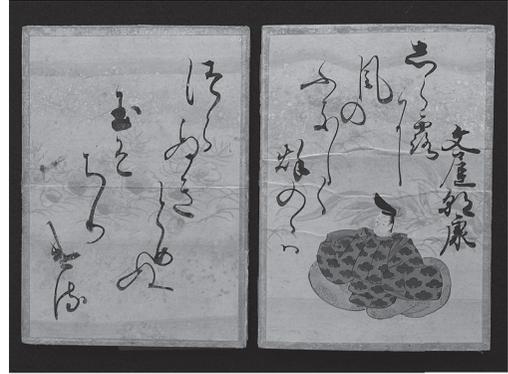
36



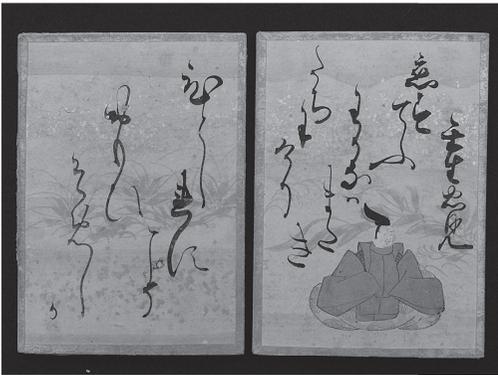
33



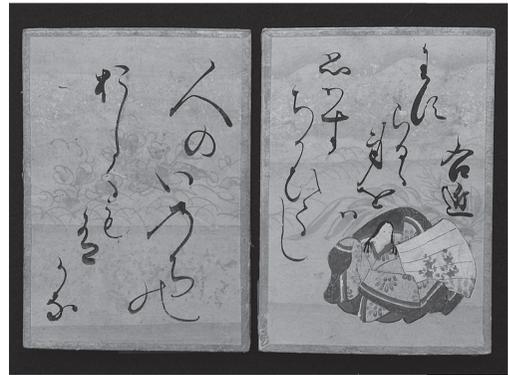
40



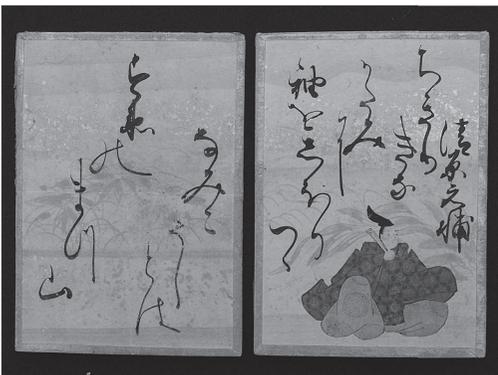
37



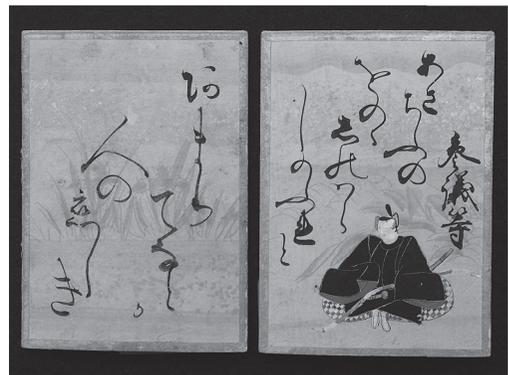
41



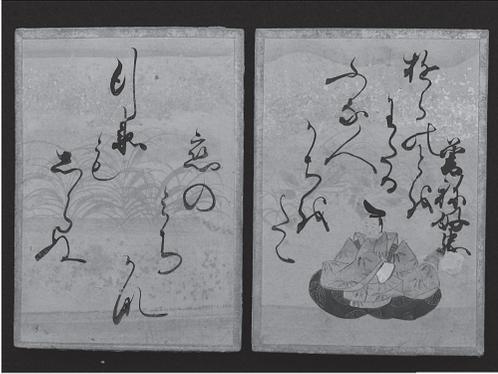
38



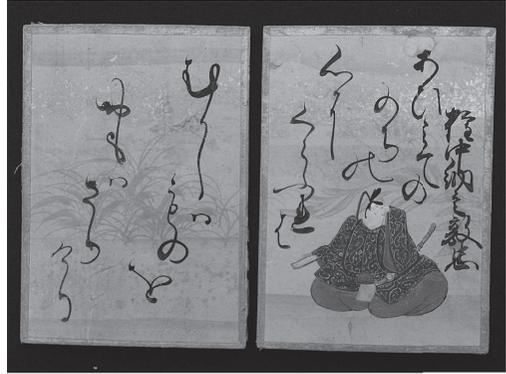
42



39



46



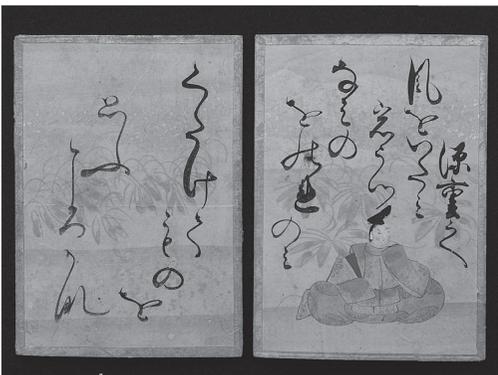
43



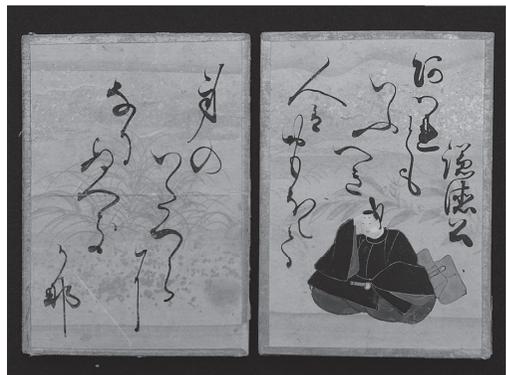
47



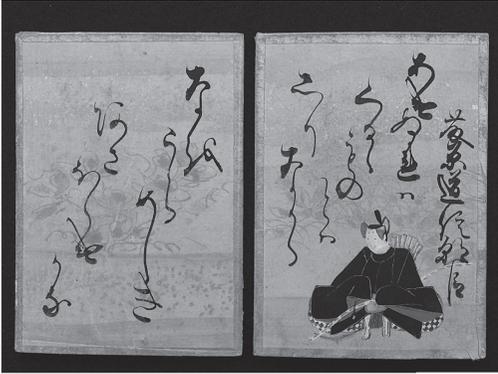
44



48



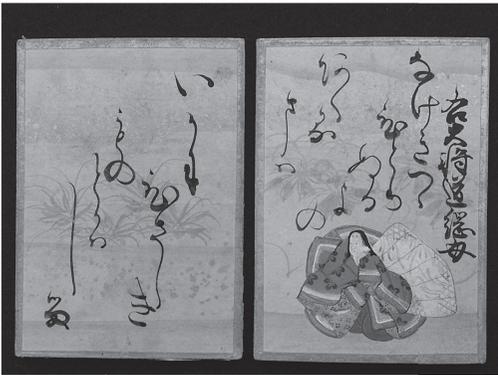
45



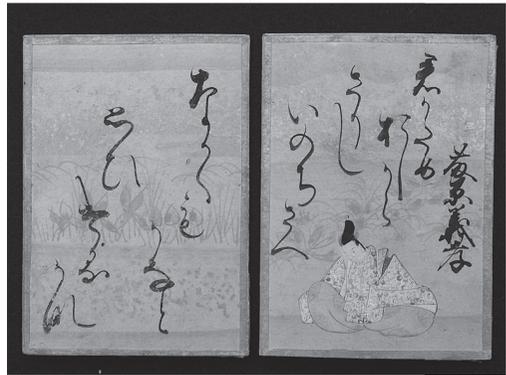
52



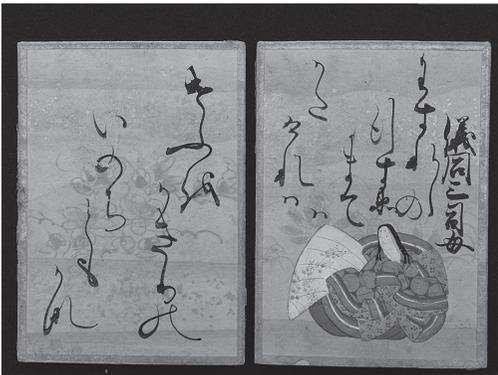
49



53



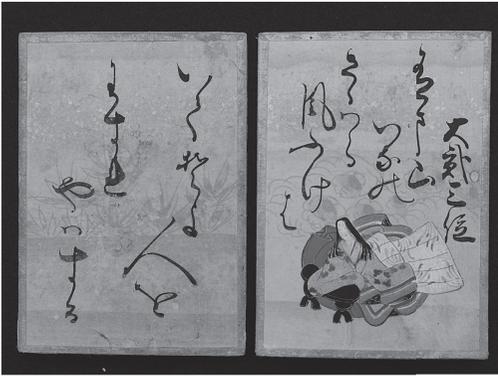
50



54



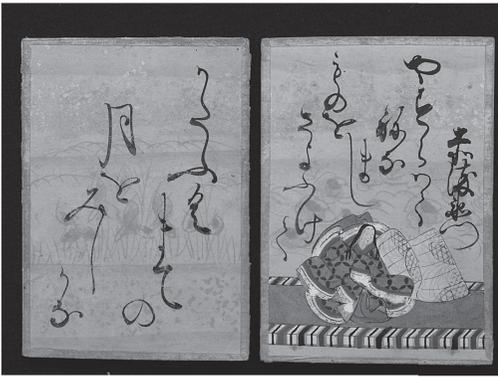
51



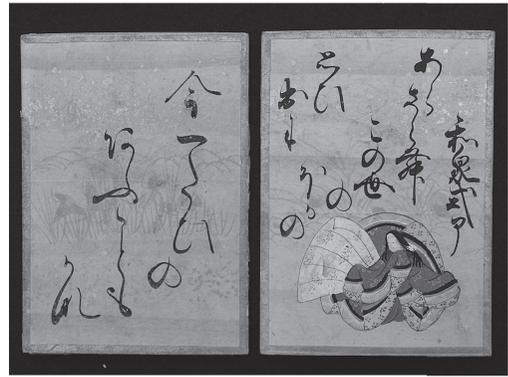
58



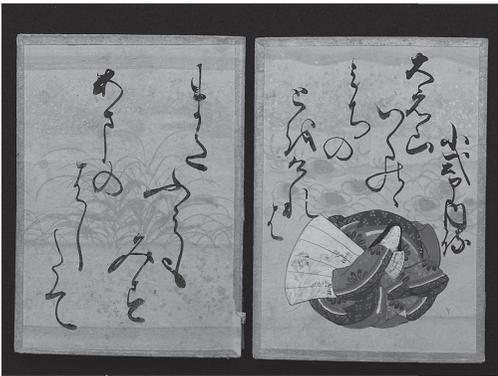
55



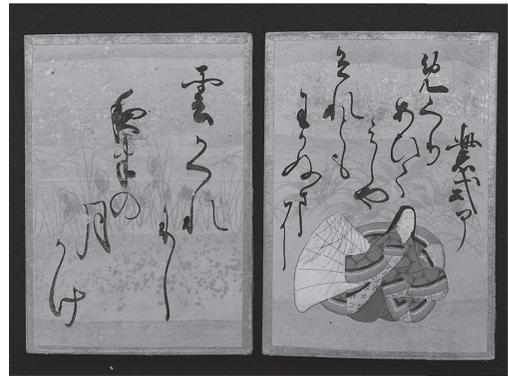
59



56



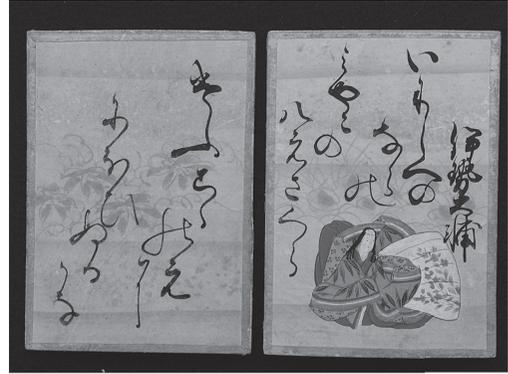
60



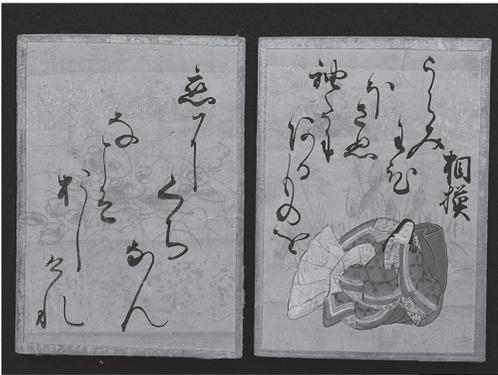
57



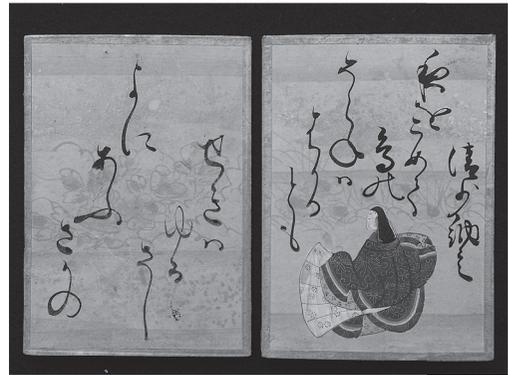
64



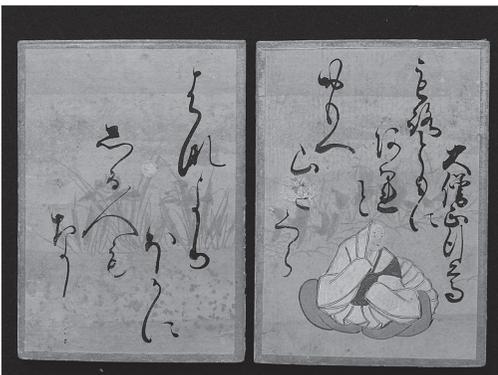
61



65



62



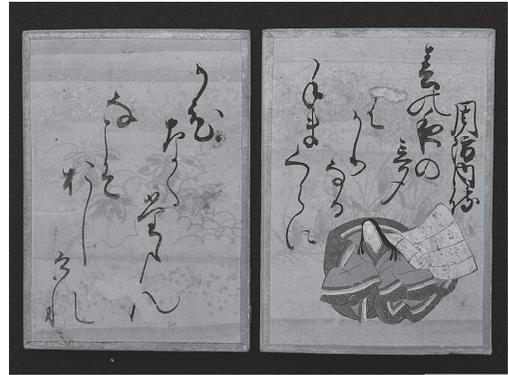
66



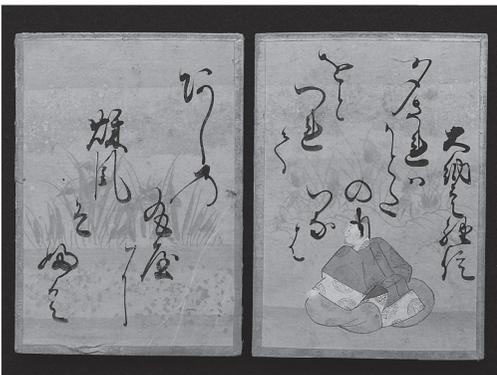
63



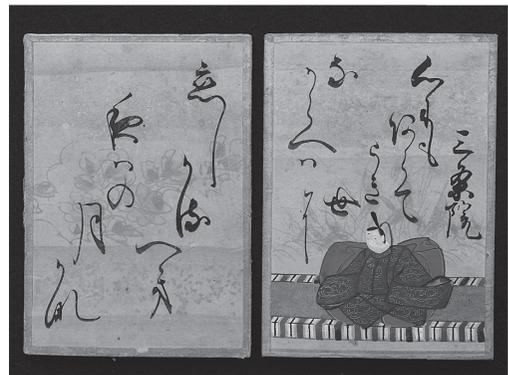
70



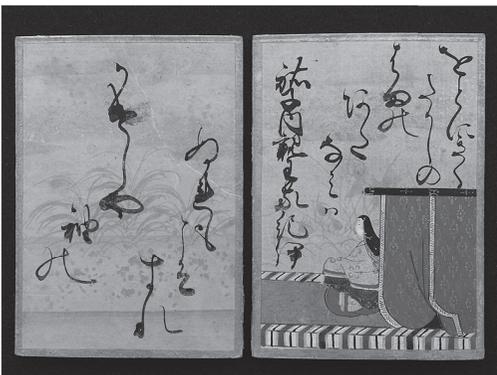
67



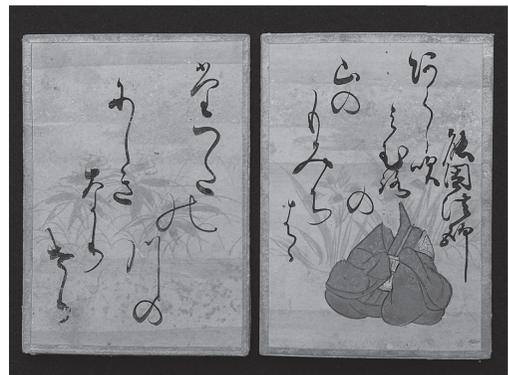
71



68



72



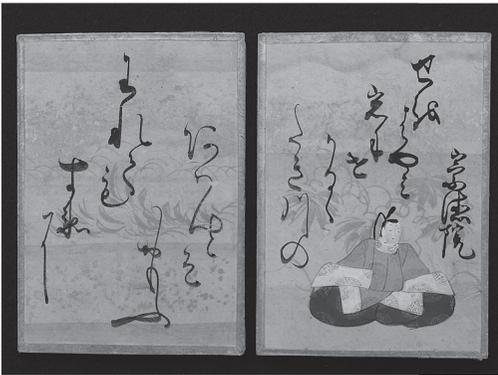
69



76



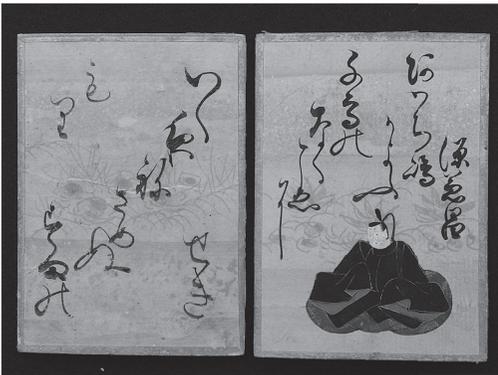
73



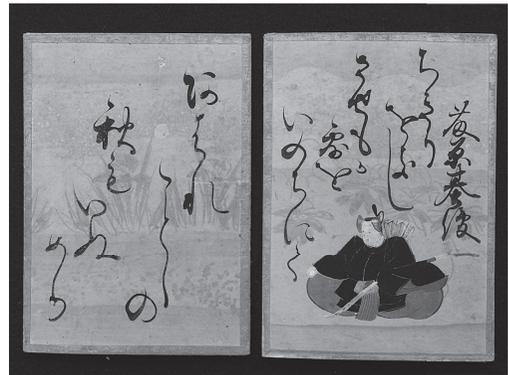
77



74



78



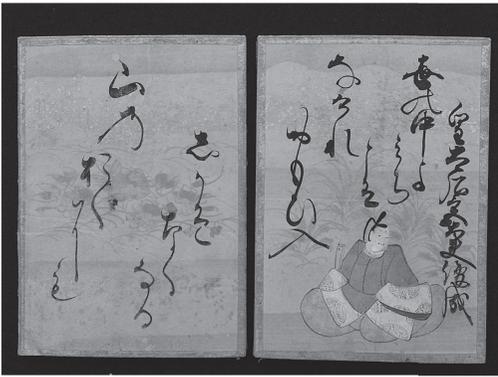
75



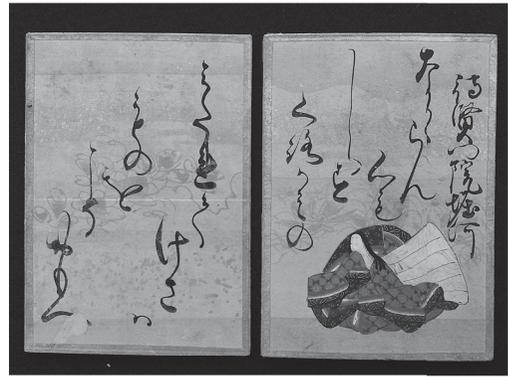
82



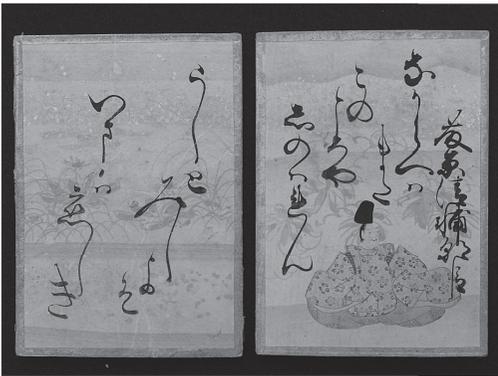
79



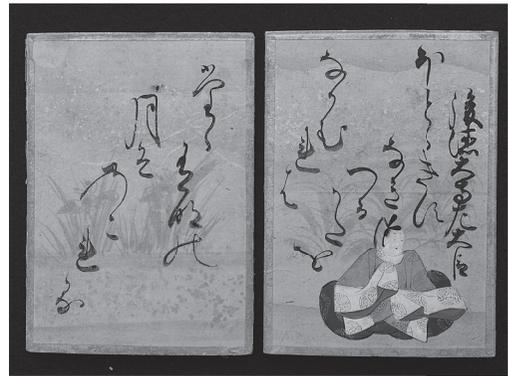
83



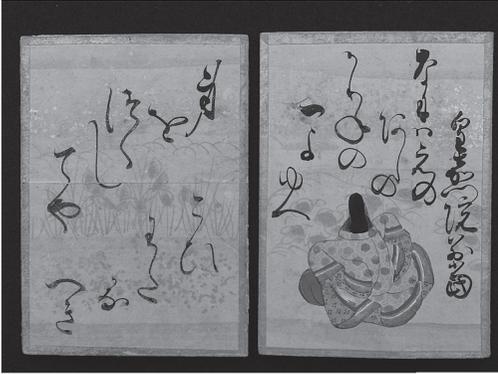
80



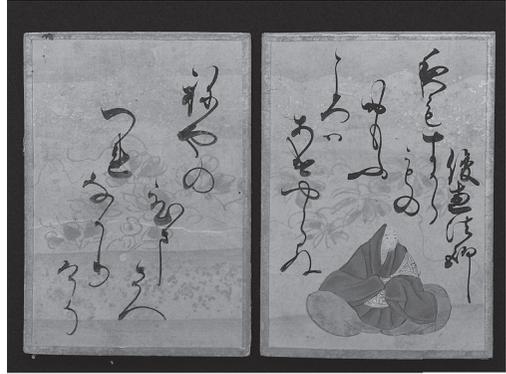
84



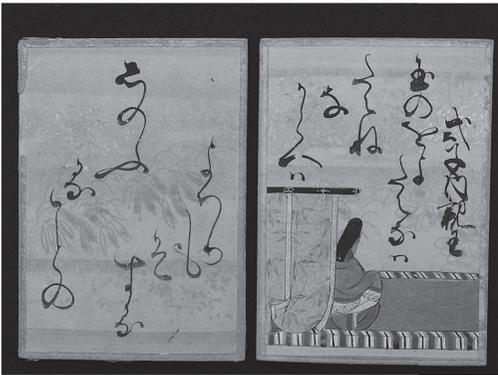
81



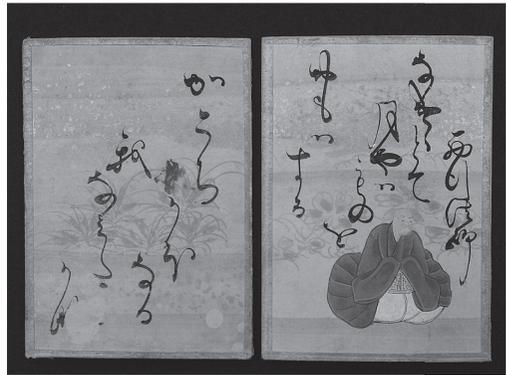
88



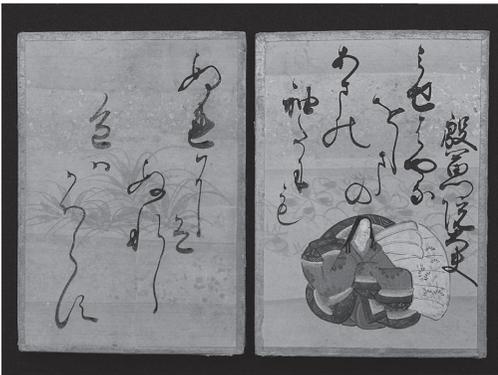
85



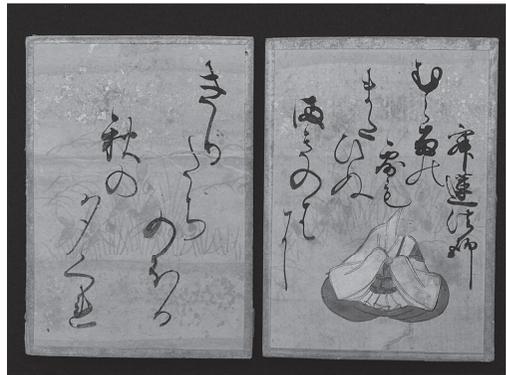
89



86



90



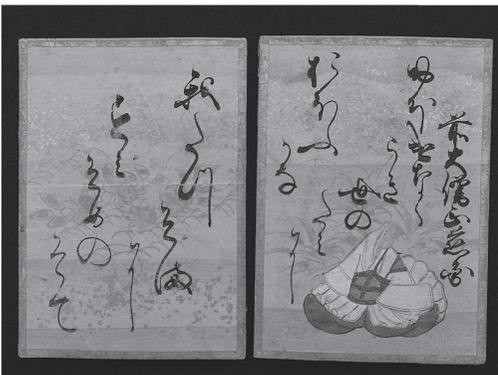
87



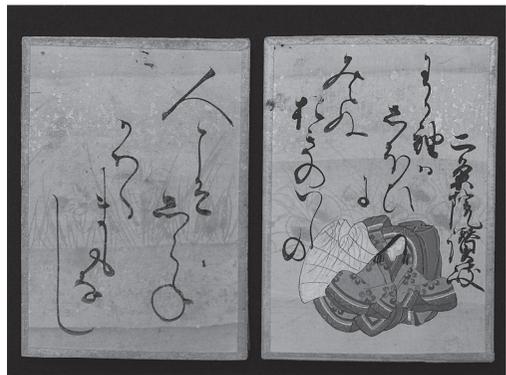
94



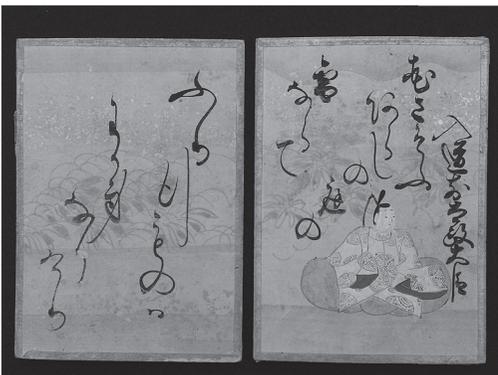
91



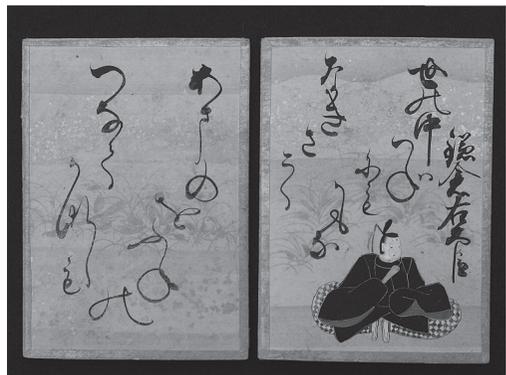
95



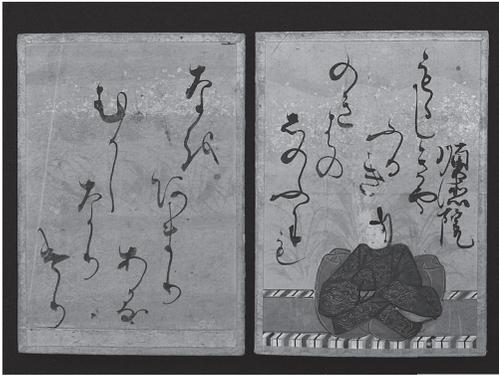
92



96



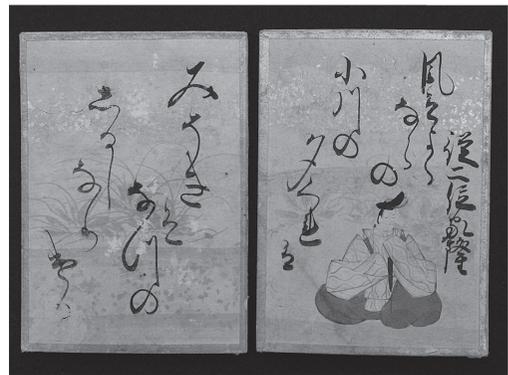
93



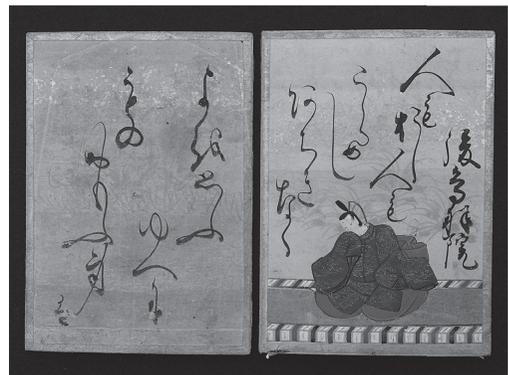
100



97



98



99

【付記】

本稿を成すにあたり、跡見学園女子大学図書館から『ゑ入尊圓百人一首』及び素庵本模刻画『百人一首』の掲載許可、武庫川女子大学附属図書館から延宝六年刊『百人一首像讚抄』の掲載許可、上田市立上田図書館から花月文庫蔵「長谷川光信画百人一首」の閲覧・撮影・掲載許可を賜りました。

また、九州産業大学図書館からは、「百人一首かるた」の閲覧・掲載許可を賜り、同カルタの画像データを御提供いただきました。

ここに記して、深謝の意を表します。

【註】

註1 『百人一首絵』（『国文学 解釈と鑑賞』第48巻1号、一九八三年一月）

なお、『百人一首』の歌仙絵に関しては、以下の先行研究も参考にした。

① 島津忠夫「百人一首成立の背景―歌仙絵との関係をめぐって―」（『国語 国文』第31巻第10号、一九六二年一〇月）

② 島津忠夫訳注『新版百人一首』（角川ソフィア文庫、一九九九年）

③ 江橋崇「百人一首かるた成立期の謎」（『月刊文化財』No.328、一九九一年一月）

④ 江橋崇『ものと人間の文化史173 かるた』（法政大学出版局、二〇一五年）

⑤ 吉海直人「『百人一首』とかるた絵」（『国文学 解釈と鑑賞』第63巻8号、一九九八年八月）

⑥ 吉海直人『百人一首への招待』（ちくま新書、一九九八年）

⑦ 吉海直人『百人一首かるたの世界』（新典社新書、二〇〇八年）

註2 吉田幸一編著『百人一首為家本・尊円親王本考』（笠間書院、一九九九年）
花月文庫分類・請求番号・百人一首・1。登録書名・『百人一首』。光信本については同本を参照・引用した。

註3 素庵本については、吉田幸一前掲書（註1⑧）所収の影印を参照・引用した。

註4 延宝六年刊『像讚抄』については、武庫川女子大学附属図書館蔵『百人一首像讚抄』（武庫川女子大学・武庫川女子大学短期大学部リポジトリ）に画像が公開されている。

<http://id.nii.ac.jp/1479/00000983/> を参照・引用した。

註5 尊円本については、築瀬一雄・榊原邦彦・藤掛和美編『和泉書院影印叢刊33 画入尊圓百人一首』和泉書院、一九八二年、跡見学園女子大学図書館蔵『ゑ入尊圓百人一首』（刊年不明。跡見学園女子大学図書館ホームページに画像が公開されている。 https://trc.adac.rtc.co.jp/html/ImageView/1171055100/1171055100200010_0010368066/）を参照・引用した。

註6 中納言兼輔が持つ笏の有無

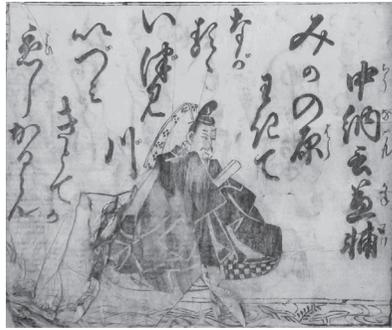
素庵本（画像①）では袍の肩口付近に見える髪が笏の形に似ているためか、尊円本（画像②）。跡見学園女子大学図書館蔵本（註5）による）の笏は、素庵本の袍の肩口付近にできた髪とはほぼ同じ位置に描かれている。跡見学園女子大学図書館が所蔵する素庵本模刻画『百人一首』（画像③）。跡見学園女子大学図書館ホームページに画像が公開されている。 <http://ardaiib2.atomi.ac.jp/repo/repository/hyakunin/0000000017/>）では、肩口付近の髪は素庵本と同じだが、右手に笏を持つ姿が描かれる。なお、『像讚抄』（画像④）。詠者名の上に「二七」と朱書する）・光信本（画像⑤）の笏は、装束の髪に紛れない状態で描かれている。

画像① 素庵本



画像② 尊円本





画像⑤ 光信本



画像③ 素庵本模刻画



画像④ 『像譜抄』

註7 江橋崇前掲論文(註1③)

註8 吉海直人前掲論文(註1⑤)、吉海直人『だれも知らなかった「百人一首」(ちくま文庫、二〇一二年。初出は、春秋社より二〇〇八年刊)。